

## 学生として参加する里山保全活動 ～キャンエコ里山班～ 人間環境学部2年 瀬尾 桂介

大学に入学した時の私は、「何かやってみたい」という気持ちはあるけれど、何をすればいいのかわからない」という思いを持っていました。そんな時に出会ったのが、現在所属している環境サークル「法政大学キャンバスエコロジーフォーラム」、通称キャンエコです。キャンエコの活動は、圃田保全や里山保全、学祭での環境対策など、その分野は多岐にわたり、現在では約10の班に分かれて活動しています。大学生活において何かきっかけが欲しいと感じていた私は、まずは様々なキャンエコの活動に積極的に参加しました。その中で、私が最も興味を持つようになったのが、里山での活動です。

キャンエコ里山班は、茨城県上浦市の茨城にある里山をメインフィールドに、毎月一回、地元NPO「茨城の自然と歴史の会」の方々のご協力をいただきながら活動しています。稲刈りや草刈などの農作業で汗を流したり、釣りや竹の削りなどしたり……その多くは若狭部会で生活しては体験できないことばかりです。そして、現地の景観を野で感じながら、里山の歴史的背景や伝統文化などを学んでいます。また、活動に対する私たちのスタンスとして、「里山を楽しむ」ことを大切にしながら活動を続けています。

初めて茨城の里山に行った時に感じたこととして、純粋な自然に対する感動と、懐かしさのようなものがありました。考えてみれば、自分か小さいころ虫取りをして遊んでいた場所が、今となっては開発されてしまっている、なんてことはよくある話。そう考えると、穴塚のようにあんなにだけ里山が残っていることが、どれだけ素晴らしいことなのかを感じずにはいられませんでした。私は最初の活動にしてすっかり里山の素晴らしさにまぎってしまいました。

そもそも「里山」というのは、人の手が加わった自然のことです。昔から人々の生活とは密接なつながりを持っています。そして、そのような自然と人間の関係を見つめ直すための場としても、重要な存在であるといえるでしょう。しかし、開発などによってますます失われつつあるのが現状で、穴塚の里山も例外ではありません。市の開発計画に対して、会の方々の必死の努力によってその存在は守られています。

そんな穴塚での活動は、私たちキャンエコだけでなく、会の方々にとっても意味のあることといえるでしょう。それは、会の方々の思いとして、穴塚の歴史や文化を未来に伝えたいという気持ちがある中で、特に私たち若者と共に活動すること、その思いを伝えていくことができるからだと思います。

そこに、私たち「学生」がこのような活動に参加することの大きな意義があると私は思います。

また、この班が活動していく上で大切なことは、「継続」することでもあると思います。キャンエコの先輩が最初に穴塚の里山を訪れたのは2002年の11月ですが、そこから里山班の活動は始まりました。毎月一回ながらも里山で活動し続けてきた成果が、徐々に余の方々にも認められ、現在ではいくつもの加えが加えられてきたりもなりました。ここ数年では、学祭での出店のためにキャンエコ班から取組した中ツマイモを使って大判焼を作ったりもしています。今後も、まずは続けていくことを目標に活動していきたいと考えています。

キャンエコ里山班は、これからも会の方々の方々や先輩方への感謝の気持ちを忘れずにかんはっていきまします。そして、この危機を通して、私自身も成長できたと思っています。

最後に、私のいつもの里山の楽しみといえば、「作業後のお茶ご飯」です。これに尽きます。みなさんもぜひ、笑顔をこぼしながら行ってみてはいかがでしょうか？





社会学部2年 大竹 大

環境系総合サークルH.E.L.P.Iは、1997年に設立され、現在60名以上が在籍している多摩キャンパス唯一の環境サークルです。少しでも環境について興味を持つ、関心がある人が集い、情報交換や新たな活動へ進むための「場」を創ると。そして、環境問題を楽しく学び、新しい発想で環境問題を解決するための代替的な活動を大学、地域などで行う。また、H.E.L.P.Iの活動が良い意味での遊びの延長線上のものとなり、知的工夫を心がけ、「楽しく」活動することをコンセプトに活動しています。

例えば、2005年2月の発効を期に京都議定書について勉強した私たちは、各家庭での省エネ・省資源の取り組みの重要性を再認識し、一人暮らしの学生にとって取り組みやすく効果的な対策を講べるため、この冬から環境家計簿を付け始めました。

各メンバーの興味によって様々な活動を行っており、都市部を夜通しゴミ拾いながら歩く「ゴミ拾いウォーナルナハイク」(6月)、子供たちへの環境教育活動と「D.R.P. (Dish

Return Project)」というゴミ減量対策を行う「小金井平和盆踊り大会」(8月)などのほか、大学近くの川をお借りして野菜を育て、収穫の喜びを味わうことも、その一つです。

そんなH.E.L.P.Iの代表的な活動に、多摩地区自主法政祭(10月)での取り組みがあります。大学祭では多くの容器ゴミが発生します。その対策として、2005年度は生協との協力で行サイクル可能な容器「リリパック」を試験的に導入しました。学生への周知を図る目的が達成されたため、来年度から生協で販売される弁当容器に採用される予定です。

また、今年度の新しい試みとして、岡部雅史先生(経済学部)率いる「多摩キャンに虫を復活させ隊」の活動への協力や、企画サークルNICE-岳と協力したMV審美進イベントを催すなど、外協団体との協働にも積極的に取り組んでいます。

上記の活動はほんの一部ですが、H.E.L.P.Iは2006年度もさまざまな活動を通じて、「楽しみながら」環境改善活動を続けていきます。

[http://www5f.biglobe.ne.jp/~baroque\\_works/orange/](http://www5f.biglobe.ne.jp/~baroque_works/orange/)



ゴミ拾いウォーナルナハイクを練えて 2005年6月

## 多摩キャンパスでホテルを復活させ隊がスタート

作業者は、ネオバリオ隊長が池の地形や周囲の植付プロセスを説明後、スコップやカマの使い方をレクチャーしました。できると職員たちは運河を手に、運河土の掘削場所となる洞窟(1号棟)内の池床を掘削して池を作りました。水深はおよそ100センチの深さ。池の周囲には草花や樹木を植付(植付は70センチ)し、池の水をポンプアップしていき、多摩は全面的に池が広がる予定です。その手前からは、運河の川面に沿って敷かれた工事用のフェンスが、まもなく撤去されます。また、池の水をポンプアップしていき、多摩は全面的に池が広がる予定です。その手前からは、運河の川面に沿って敷かれた工事用のフェンスが、まもなく撤去されます。また、池の水をポンプアップしていき、多摩は全面的に池が広がる予定です。その手前からは、運河の川面に沿って敷かれた工事用のフェンスが、まもなく撤去されます。



環境系総合サークルH.E.L.P.Iは、1997年に設立され、現在60名以上が在籍している多摩キャンパス唯一の環境サークルです。少しでも環境について興味を持つ、関心がある人が集い、情報交換や新たな活動へ進むための「場」を創ると。そして、環境問題を楽しく学び、新しい発想で環境問題を解決するための代替的な活動を大学、地域などで行う。また、H.E.L.P.Iの活動が良い意味での遊びの延長線上のものとなり、知的工夫を心がけ、「楽しく」活動することをコンセプトに活動しています。

環境系総合サークルH.E.L.P.Iは、1997年に設立され、現在60名以上が在籍している多摩キャンパス唯一の環境サークルです。少しでも環境について興味を持つ、関心がある人が集い、情報交換や新たな活動へ進むための「場」を創ると。そして、環境問題を楽しく学び、新しい発想で環境問題を解決するための代替的な活動を大学、地域などで行う。また、H.E.L.P.Iの活動が良い意味での遊びの延長線上のものとなり、知的工夫を心がけ、「楽しく」活動することをコンセプトに活動しています。

環境系総合サークルH.E.L.P.Iは、1997年に設立され、現在60名以上が在籍している多摩キャンパス唯一の環境サークルです。少しでも環境について興味を持つ、関心がある人が集い、情報交換や新たな活動へ進むための「場」を創ると。そして、環境問題を楽しく学び、新しい発想で環境問題を解決するための代替的な活動を大学、地域などで行う。また、H.E.L.P.Iの活動が良い意味での遊びの延長線上のものとなり、知的工夫を心がけ、「楽しく」活動することをコンセプトに活動しています。

## 千代田区における企業の環境教育支援活動に関する調査研究報告 ～学校と地域社会が連携し貢献して環境教育をすすめるために～

法政大学地域研究センター・リサーチアシスタント  
法政大学大学院政策科学研究科修士  
山田 元紀

近年、環境教育への企業の参画が企業のCSR活動の一環として注目を集めています。そこに、企業の社会的貢献活動が学校での環境教育の支援に結びつく、という二つの面をみることであります。

地域研究センターは、環境教育への企業の参画について、千代田区内立地企業と区立小中学校の関係者を対象に、平成16年と17年に実態調査研究を行いました。

### 1 はじめに

昨今、環境教育が世界的に注目されています。例えば、平成17年は、「国連持続可能な開発のための教育の10年」の最初の年に当たり、わが国では環境省が平成16年に、「環境の保全のための意識の増進および環境教育の推進に関する法律」を制定し、家庭・学校から広がる環境の国づくりをめざしています。こうした環境教育への期待は、多様な環境問題解決には環境教育の充実が欠かせないと認識されるようになったからです。環境教育はその問題の性質から最新の知識や情報、専門性などの点で学校の先生たちだけでは難しいといった指摘もあります。そのためには、国や自治体、企業、大学あるいはNPO・NGOなどの民間団体や地域住民も含めた多くの関係者の連携と協働が望ましいとされています。

すでにいくつかの地域社会では創業者夫妻された環境教育が実施されていますが、それらは教育一般の画一的なものではなく、個性的で豊かな内容のものであり、それに関連する研究も一部の研究者によって積極的に進められています。地域研究センターは、特に企業が参画する環境教育に着目して、企業と学校とが環境教育を協働して行うためにどのような関係を作り上げる必要があるのか、そのための条件はなにか、などを調べてきました。

### 2 千代田区の環境教育の実態

千代田区は、平成15年度にISO14001の認証を取得し、翌年に区内幼小中学校全部で認証拡大を行い、学校でのISO運営の重要課題を環境教育と位置づけています。

一方、千代田区の区間人口は概に85万人(内、区内の

学校に通学する学生数は10万人である)を超えますが、夜間人口は4万人と極めて特異な地域であります。また、区内には36,000の事業所が存在し、その内の約300社は上場企業の本社で、ISO認証取得事業所も175ヶ所を超えています。

このように、千代田区の環境教育重視のあり方と環境に配慮した経営を口指している優れた企業が多く存在しているという二つの点に着目して、「企業と学校が連携して行う環境教育」の可能性を二年間にわたって調査研究を行なってきました。

平成16年度は、千代田区に本社を置く上場企業が「良い企業市民」としてどのような公益的貢献を行っているのかを上場企業298社にアンケートとヒアリング調査を実施しました。また、環境報告書などから企業の社会貢献の全体像を把握し、千代田区への社会貢献活動の実態調査を行いました。

その結果、6社が環境教育を通しての地域支援活動の意思のあることが分かり、平成17年度の調査は、千代田区内立地企業が学校が環境教育支援を行なうことの可能性と、それを実現するための条件について調査研究を行ってまいりました。

### 3 企業と学校が協働する環境教育

環境教育への協力を申し出ている企業に対しては、企業もつ環境教育についての資源や資質とその意向の確認についてヒアリングを行い、千代田区の84所の区立小中学校のクラス担任の先生たち全員(98名)へのアンケート調査と環境教育責任者全員へのヒアリングを、平成17年7月から8月にかけて実施しました。

アンケート調査及びヒアリングの内容は、①環境教育の実態、②企業の学校への環境教育支援の実績、③企業の環境教育支援について、④企業との連携による環境教育を効果的にするための条件など、です。また、これと平行して、わが国の各地で行われている同様の事例を調べ、その中から優れたものを数例選び詳しく調査し、あわせて先行研究についても本調査研究に資するものとして調査研究を行いました。

クラス担任に対して行ったアンケート調査から、半数以上